

## 高等学校漢文教材「画竜点睛」の授業

— 故事・辞書・用例から理解を深める手立てを取り入れた授業実践 —

山口 真 優  
中 島 貴 奈

### 一 背景と目的

#### 1. 高等学校古典学習における問題点

高等学校の指導要領改訂に先立ち中央教育審議会から示された答申（平成28年12月21日）では、古典学習の課題が次のように指摘されている。

古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないこと本実践で取り上げる「故事成語」に限らず高等学校の古典学習においては、言語文化を理解し尊重することに加え、「社会や自分との関わりの中で生かす」という観点をもたせることで、生徒の学習意欲を高めていくような活動を取り入れていくことが必要となる。だが一方で、実際の授業時間数には制限があり、基盤となる「読解」との兼ね合いをどうとるのが大きな課題だろう。

今回の実践にあたっては、読解を正確に行う「読むこと」を本筋に置きつつ、限られた時間内で少しでも生徒の意欲関心を高め、「言語文化」と「社会や自分との関わり」を意識できるような活動を取り入れることを目的とした。

#### 2. 故事成語教材

故事成語は、中学校・高等学校ともに定番の漢文教材である。中学校5社すべての平成28年度版教科書（1年生）に掲載されており、漢文学習への入り口というべき位置づけとなっている。同様に高等学校でも「国語総合」及び「古典B」のほぼ全ての教科書において漢文教材の最初に掲載され、漢文の導入教材として定着している。これは、故事成語の多くが現在もお生徒にとって身近なところで使用され続けており、古典と現代のつながりを意識させるのに適した教材であることや、指導要領の「言葉の特徴や使い方に関する事項」（〔知識・技能〕）と関連づけた指導が行えること等も関係しているだろう。

中学校における故事成語の言語活動としては、書き下し文で故事成語の成り立ちを学んだ後に例文や体験文を書く、故事成語辞典を作る、あるいは劇やマンガにするといったことが一般であると思われるが、近年ではより「社会や自分との関わり」を意識させるような取り組みも行われている<sup>注1</sup>。

高等学校教科書の「学習の手引き」等を見ても、特定箇所の読解に加えて、故事成語の「意味」や「現在どのように使われるか」を問うものや、「語を用いて短文を作ってみよう」と生徒自らの文脈で活用させるものなど、中学校に類似した活動が示されている<sup>注2</sup>。揺るぎない定番教材であるがゆえに、授業自体も読解と用例調べや短文作りを組み合わせた型に落ち着いている印象である。

しかし、故事成語が「現在どのように使われるか」については、後述するように辞書の意味（一般的な辞書の載せる意味）と、実際の使われ方（用例）とが一致しないことがあり、何をもって「現在の使われ方」とするかには曖昧さが残る。また、故事成語を生徒自身の文脈で活用させる際の問題点としては、例えば「先生の発言と行動は矛盾している」という短文は文章としては正しいものの、作成者が「矛盾」の意味を正確に理解しているかどうかまでは判じがたかったり、体験文を作らせると皆似通った内容になってしまうことなどが挙げられる。

本実践では、「現在どのように使われるか」が含みうる辞書的な意味と実際の使われ方両者を区別し、そこにもととなる故事の文章を加えた三者を行き来して比較することにより、それぞれの理解が深まるような活動を想定した。

### 3. 「画龍点睛」の故事・辞書・用例

ことばは複雑に変化するものであり、故事成語のもとになった故事と、故事から派生し現在一般的に用いられる成語の意味との間には、何らかのずれや懸隔とも言うべきものが存在することも少なくない。

例えば「助長」の語は、多くの教科書で取り上げられ、日常における使用頻度も高い故事成語の一つである。国語辞書では「ある働きかけによって、その傾向などがよりいっそう盛んになるようにすること。また、そうした結果にしてしまうこと」（『学研現代新国語辞典改訂第五版』）「能力を伸ばすように助けること。また、傾向などが著しくなるように力を及ぼすこと」（『岩波国語辞典第五版』）と説明するように、現在の日本では主として、良きにせよ悪しきにせよ何らかの傾向をより一層増長させる意で用いられる。

一方『日本国語大辞典』（小学館）には

- (1) (苗の生長をはやめようとした宋の人が、苗を引き抜いて駄目にしてしまったという「孟子—公孫丑・上」の故事から) 必要な力添えをして、かえって害になること
- (2) 好ましくない傾向をいっそう強めること。転じて、物事の成長発展に外から力を添えること

と、上記の辞書と同じ(2)の意味に、『孟子』の故事そのものを下敷きにする(1)の意味を加えた2つの意味を載せるが、現在(1)の意味での使用は稀であり、ほとんどの場合が(2)の意味での使用であろう。だが、故事そのものが叙述することは、(1)のように本来プラスに向かっていたものをさらにプラスに促そうとしたものの、かえってマイナスにしてしまったということであって、(2)のプラスをよりプラスに、マイナスをよりマイナスにという意ではない。つまり、故事と上記(2)のような現在における実際の使われ方のみを並べて見るならば、そこには明らかな隔たりがある<sup>注3</sup>。

「画竜点睛」に戻ると、故事は「助長」やよく知られた「矛盾」「五十歩百歩」のようなたとえ話として持ち出されたものではない。『歴代名画記』を出典とすることからも分かるように、画かれた龍すなわち画龍の真に迫る素晴らしさを強く印象づける話である。「画竜点睛」の語を辞書で引くと

(中国の張僧繇が金陵の安楽寺の壁に龍の絵をえがき、最後に睛を入れたら、たちまち龍が天に飛び去ったという「歴代名画記一七」の故事から)物事の眼目、中心となる大切なところ。最後にたいせつな部分を付け加えて、物事を完全に仕上げること。ほんのわずかな部分に手を加えることで、全体がりっぱにひきたつことのたとえ。最後の仕上げ。

(『日本国語大辞典』小学館)

物事をりっぱに完成させる最後の仕上げ。また、物事の全体を引き立たせる最も肝心なところ。

(『明鏡国語辞典』大修館書店)

のように、複数の意味が列挙されている。描き手である張僧繇が最後まで「点睛」をせずにおいていたことから「最後の仕上げ」といった意味が、また「点睛」された龍が躍動感たっぷりに昇天したという描写から「わずかな部分に手を加えて全体をひきたてる」といった意味が生じていると解釈できるだろう。このように「画竜点睛」の語は、もともとなる故事がたとえ話のような明確な意図を持った話ではないこともあり、重層的な意味合いを持つ語であると言える<sup>注4</sup>。

以上のような「画竜点睛」の特徴をふまえ、漢文教材「画竜点睛」については、もともとなった「故事」「辞書の意味」「実際の用例」の微妙なずれを利用し、この三者を行き来することでそれぞれの内容や意味について考えを深められるような活動を組み立てたいと考えた。故事成語は間違いなく「故事」から生じたものであるが、そこからどのような情報を取り出して「故事成語」が生まれ、どのように使用されて辞書の意味として定着してゆくかを実感することで、漢文教材としての故事本文と、現在も生きて使われる成語、両者の理解が深まると考えたからである。

## 二 授業実践の概要

【科目名】 古典B (対象学年：第2学年 男子12名・女子29名)

【教材名】 「画竜点睛」(『歴代名画記』)『改訂版 古典B 漢文編』(数研出版)

【単元名】 用例を整理し、言葉の使われ方を吟味しよう

【単元の目標】

- 1 既習の漢文の文法知識を用いて本文を読み解くことができる。
- 2 用例を文脈や書き手の意図に即して整理し、比較して違いを明らかにすることができる。
- 3 本文の読解や用例の整理に積極的に取り組み、根拠に基づいて考えを明らかにしようとしている。

## 【授業の概要】（全4時間）

## ○第1時間目：読解学習

- ・導入として「画竜点睛」を含めた四字熟語の小テスト10問を解いた。「画竜点睛」のみ正誤の確認を保留とし、本文の読解に入った。
- ・本文の音読を行い、ある程度読めるようになったところで句法を確認しながら読解を行った。
- ・最後に課題を提示し宿題とした。課題は、「画竜点睛」の語が使われているニュース記事を探して好きな記事を持ってくる<sup>註5</sup>とし、「インターネットのニュース記事検索で「画竜点睛」と入れて調べてみよう」と助言した。

## ○第2・3時間目：読解学習、グループワーク

- ・前回の振り返りを行い、引き続き句法を確認しながら読解を行った。
- ・読解を終えた後、生徒は故事の内容から「画竜点睛」がどのような意味を持つか考え、ノートに記入した。
- ・その後各自辞書で「画竜点睛」の意味を確認して自身の推測と比較した。
- ・全体で「画竜点睛」の意味の共有を行った。その際、グループワークでの意味の分類に役立つよう、「画竜点睛」の辞書的な意味を

- A. 物事を立派に仕上げるための最後の仕上げ
- B. 物事の最も肝心なところ
- C. わずかなことで全体が引き立つことのたとえ

の3点に整理した。前時に行った小テストの答え合わせも行った。

- ・次にグループワークを行った。グループワークでは4人班になり各自持ち寄ったニュース記事の用例と、教員が用意した用例<sup>註6</sup>を合わせて次の間について話し合いを行い、ワークシートに記入をした。

〈示した間〉

- ・用例を辞書の意味毎（A～C）に分類しよう
- ・不適切な使われ方をしている用例がないか探そう

## ○第4時間目：発表

- ・各グループで前話し合った内容を整理し、全体に発表するための準備を行った。
- ・発表者（班の代表者）を決め、その後発表を行った。発表はひと班3分程度でまとめたものを電子黒板に映写しながら行った。
- ・発表者以外の生徒は配布された発表評価表<sup>註7</sup>をもとに、自分の班以外の評価を行った。

### 三 結果・考察

#### 1. 生徒の様子・反応

事前に行った小テストは既習の故事成語を交えての選択式であったため、「画竜点睛」の正答率は高かった。読解に際しては重要語句や句法が多いことや、「乗雲」の表現が具体的にイメージしにくいことなどから、想定以上に時間を要した。故事から「画竜点睛」という故事成語の意味を予想する活動では、多くの生徒がその時点までに「画竜点睛」の意味をおさえていたこともあり、おおよそ辞書的な意味に近い意味を書き出していた。

〈生徒が故事「画竜点睛」の内容から類推した意味〉

- ・物事があいまいではなく、しっかりとやりとげること
- ・完成しているより、未完成のほうがよい
- ・物事を完成させるための最後の仕上げ
- ・最後の仕上げが残っていること

しかし、予備知識を持たずに話の内容からのみ推測した生徒の中には、上記の通り「完成しているより、未完成のほうがよい」といった意味を導いた者もいた。

続いて前掲A～Cのように「画竜点睛」の辞書的な意味を整理して提示し分類を行わせる活動では、生徒は分類に苦慮していた。生徒が持ち寄ったニュース記事の用例は多岐にわたっており、政治関連のニュースに見られる「画竜点睛を欠く」の用例が最も多かったものの、サッカーの試合におけるボランチ（MF 選手）の働きや、スーツスタイルにおけるネクタイの効果を「画竜点睛」と表現するものなど、生徒それぞれの興味関心に基づいて選ばれていた。そのためお互いの選んだ用例に対する関心も高く、話し合いの活性化に役立っていた。

#### 2. 総合的考察

故事の内容から「画竜点睛」の意味を類推させる活動では、前述の通り「完成しているより、未完成のほうがよい」という意味を導き出した生徒がいた。これは、人々が張僧繇に強いて「点睛」、竜の眼を描き入れさせたことにより、竜が生氣を得て昇天するという躍動的な描写を、「竜がいなくなってしまった」と消極的に解釈したことの表れである。『歴代名画記』という出典についての理解が不十分であれば起こりうる解釈であって、現代語訳のみでは分からない生徒の「解釈」の幅を窺わせるものであった。読解に際しては出典となる書の持つ性格についての説明も重要である。

故事とそこから派生した成語の意味を考える上で、故事の内容から意味を類推させる活動を行うことは非常に効果的だと考える。「画竜点睛」の故事は決して長い文章ではないが、故事のどの部分に注目するかで受け取るメッセージの内容も変わってくる。すでに十分な予備知識や先入観を持って読む授業者には気がつかない解釈を呈する生徒があるかもしれない。また、予備知識に引かれたとはいえ「最後の仕上げ」的な意味を導いた生徒が多く、Cは見られなかったことから、「点睛」により生氣を得て躍動をはじめた竜という描写に対する印象は薄いことがわかった。

続いて、現在における「画竜点睛」の使われ方を大まかに把握するため、生徒から出された辞書的な意味を3つに分けて示し、それをもとに用例を分類させるといった方法をとったが、生徒の持つ辞書によって記載が異なるため、授業者が3つに分類する時点で手間取ってしまった。この点については辞書でおおよその意味を確認して共有し、それぞれの用例の検討に入るという流れが適当であったと思われる。

同様に、生徒が用例を分類する際にも、特に意味のAとBについては両者を備えているものもあって違いが曖昧だったこと、授業者の準備した用例が多すぎたことなどが理由で非常に苦慮している様子が見られた。「画竜点睛」の用例については、インターネットで検索した上位の例を持ってくる生徒が複数いることで偏りが生じるのではないかと懸念したため、授業者からも用例を用意したが、内容理解と分類に時間がかかりすぎ、生徒の負担となっていた。実際には各自興味のある分野から様々な用例を持ち寄っており、生徒の用例のみで十分であった。記事は政治や経済のみでなくスポーツやファッションと多岐にわたっており、互いの持ち寄った用例に興味を持ち意欲的に活動に取り組む姿勢が見られたことから、ニュース記事から用例を探すという試みにも主体性を促す効果があったと言える。

最後の発表についても、発表評価表を提示することで発表者としてどのような注意が必要かの指標となり、聞く側も発表をしっかりと聞く姿勢ができていた。

全体としては、本文の読解に時間がかかり、全3時間の予定が4時間になってしまうなど、時間配分の見通しが甘かった点、そのため故事成語の意味の考察や分類に時間がとれなかった点が改善すべき事である。

実践の目的は、辞書の意味や実際の用例をもとに再度故事の本文に戻って比較し、故事自体の読みも深める点にあったが、故事に戻る十分な時間がとれなかった。生徒の準備した記事の中には、サッカーのボランチ選手が一人入ることで全体の運動が良くなりチーム全体に活気が生まれた様子を「画竜点睛」と表す例や、ファッション記事でもネクタイや靴一つでスーツスタイルが引き締まることを「画竜点睛」とするものなど、生徒が注目しなかったCに近い意味で用いるものも多かった。こうした例をもとの故事と引き比べて考える活動ができていれば、「点睛」することで生氣を得て昇天する竜という描写への理解も深まっただろう。

また、今回は実習校との調整もあって読解を先に行う形となったが、導入で自ら探してきた用例による意味の類推を行い、その後に読解を行うことで、元になった故事と現在の用例とのつながりや違いを考えさせるといった手順を踏む方が、読解への意欲を高められたように思う。

本実践では、十分な時間をかけて読解をしっかりと行いつつ、限られた時間の中で意欲を高める言語活動を取り入れていくことの難しさを改めて知る結果となったが、僅かなりとも効果的な活動を取り入れるための手がかりを得ることができた。今後も授業の現状をふまえた上で、生徒が古典を「社会と自分との関わりの中で」捉え、意欲的に学習できるよう手立てを考えて行きたい。



## 注

- 1 例を挙げると、故事成語を用いて世の中の出来事にコメントを付けるという菅原利晃氏の実践（「故事成語」の授業（中学校三年）—「故事成語」を用いた〈例文作り〉は中学校一年か三年か高等学校一年か—）『国語論叢』3号（2014年9月）、たとえ話で相手を説得している漢文（「漁夫の利」）を読み、その論理の展開を、考えの交流を通じてとらえるという秋田哲郎氏の実践（「中学校において漢文を学ぶ意味—中学校での授業事例とともに—」『日本語学 特集漢文をいかに教えるか』vol.36-7（2017年7月））などがある。
- 2 筑摩書房『精選 国語総合 古典編改訂版』、東京書籍『国語総合 古典編』、第一学習社『改訂版新編国語総合 古典編』等。第一学習社『改訂版新編国語総合 古典編』では、「古典のしるべ」として、音楽をよく理解するという意味であった「知音」の語が、どのように「知己」と同様の意味を持つにいったかという、故事成語の成立の経緯を説明する文章を載せる。
- 3 吉田正美氏は「中国においては、悪い意味に用いる、『孟子』を出典とする用法の「助長」の場合には「掘苗助長」または「拔苗助長」と四字の成句として用い、二字の「助長」を用いる事はまれである」と両者が区別されていることを指摘した上で、日本では「掘苗助長」が「助長」と略されてしまったことにより「かくして、「助長」の、いい意味・悪い意味の混同の歴史がはじまったと見るわけである」と述べる（「故事成語を見直す—出藍・蛇足・助長をめぐる」『奈良教育大学国文：研究と教育』7巻（1984年3月）。実際、中国では四字で使用されている故事成語が日本では二字に省略されている例は少なくない（「守株待兎」「画蛇添足」など）。また門屋温氏は「五十歩百歩」は本来「程度の差はあっても本質的な違いはない」ことを説得するために持ち出されたたとえ話であるのに、前後の文脈が顧みられないことにより、あたかも「五十歩」と「百歩」そのものに大差が無い意であるかのように誤解されているとして、「たとえ話の部分だけを抜きだして載せたのでは、この肝心な「故事成語」が生まれる仕組みが伝わらない。原文を全文載せるのは無理だとしても、要約だけでも載せて、どうしてその言葉にそういう意味が生じるようになったかがわかるようにしなければ、「故事成語」が故事成語たりうる所以を学ぶことができない」と述べる。「五十歩百歩」は大差のないこと—漢文「故事成語」指導の問題点（『いわき明星大学人文学部研究紀要』第28号（2015年3月））
- 4 現在よく目にするのは「画竜点睛を欠く」の形であり、授業を行う際にはこちらも併せて取り上げる必要がある。辞書の「画竜点睛を欠く」の説明は以下の通りである。  
全体としてはよくできているにもかかわらず、肝心なところが不十分であることのとえ  
（『日本国語大辞典』小学館）  
最後の肝心な点が不十分であるため、完全でないことのとえ  
（『学研現代新国語辞典改訂第五版』）  
「画竜点睛を欠く」は、単に「点睛を欠く」ともいい、「点睛」とは画龍に生氣を吹き込む総仕上げとして睛を描き入れることである。故事では「点睛」しないからといって「睛」の無い画龍の価値が貶められているわけではないが、「画竜点睛を欠く」の用例を見る限り、消極的・批判的な文脈で、肝心な部分や最後の仕上げが欠けていることで全体がだめになってしまうことを指すことが多いようだ。日本において、「画竜点睛を欠く」あるいは「点睛を欠く」という表現がいつから使われるようになったか、また中国にも「画龍不点睛」（龍を描いて点睛せず）という表現はあるが、両者の関連性がどのようになっているか等については改めて考えたい。
- 5 現在の用例として「ニュース記事」に限定した理由としては、「『故事成語』の成り立ちはもともと政治・政策に関するものが多いのだから、現代の世の中のこと、世の中のニュースがあてはめやすいと考え、これらを指定して考えさせることにした。生徒の身の周りのことに限定しては学習が進まないと考えたからである」という菅原利晃氏の指摘（前掲論文）を参考とした。
- 6 朝日新聞のデータベース（朝日新聞記事データベース開蔵Ⅱ）を利用し、「画竜点睛」の使われ方や分野の異なる7つの記事（1991年～2018年）を用意した。
- 7 3つの項目「話し方：声の大きさが適切で聞き取りやすいか」「発表内容：根拠が明確で納得できる内容か」「資料：発表内容に合わせて見やすくまとめられているか」を1～5段階で評価できるよう

にした。また、「ひとこと」として改善点などを記入できる欄を設け、最後に合計点を記入するようにした。

- 8 授業実践当時は長崎大学大学院教育学研究科在籍。

(長崎県立長崎北陽台高校<sup>註8</sup> やまぐち まゆ)

(長崎大学人文社会科学域 なかじま たかな)